

カフェの裏にはオーガニックハーブ畑が広がる。夏の緑に映える赤しそ畑に立つのは舟山さんと奥様のはるみさん、ご子息の亮真さん。

# みんな ハーブが 教えてくれた。

土建屋さんのオーガニックハーブ物語

北見市  
有限会社香遊生活  
代表 舟山 秀太郎さん

北見市の中心部から車で十数分、町道から脇道へ、さらにこんもりと緑が茂る雑木林を抜けるとカントリー調のログハウスカフェが見えてきます。その屋根越しの丘に広がるのは色とりどりのハーブ畑。よく晴れた初夏のある日、取材チームはオーガニックハーブ栽培で知られる「有限会社香遊生活」の舟山代表を訪ねました。

## 全国にファンを持つ 香遊生活のハーブティール

香遊生活のロゴを初めて目にしたのは札幌マチナカの複合型商業施設。さまざまなテナントが軒を連ねるフロアの中、ひときわ若い女性客で賑わっていたショップ内にあったのが香遊生活のハーブティールだったはず…。

そんなことを思い出していた時「お待たせしました」という洪い声。カフェの奥から現れたのは瘦身の紳士。スツと差し出した名刺には舟山秀太郎という名前とともに株式会社舟山組代表取締役の文字が。ふ、舟山組？

「実は自分は北見を拠点に、土木建築業や造園に取り組む会社の代表でもあるんです」



〈オーガニックハーブ〉VS〈土木建築〉。ふたつのキーワードのギャップに首を傾げる私たちを横目に、舟山さんはニコリ。

「じゃ、その辺りから話を始めましょうかね」

## 地元の土建屋さんが オーガニックハーブを？

舟山さんは現在64歳。法政大学を卒業後、地元北見に戻り家業である舟山組の社員として働き始めました。転機が訪れたのは40歳の時。すでに同社の中軸として働いていましたが、ご自身がこの業界の知識や経験しかないことにもどかしさを感じるようになります。このままでいいのだろうか。親が敷いてくれたルール以外にトライできることはないか。そんな折、頭の中に浮かんだのが「農」の文字。

「若い時分から農や食への関心はありました。ただやるなら他の人と違うことをしたかったし、農業や化学肥料にも頼りたくなかった」

ではなにがいいだろう。取捨選択を繰り返す中で閃いたのが、心身のリラクゼーションなどで注目



香遊生活の拠点、北見市柏木にあるオーガニックベジカフェ「葉奏（ハノン）」。ハーブティールはもちろん、有機栽培の野菜や豆をつかった体にやさしい料理も楽しめます。

されつつあったハーブの栽培。

「もともと北見は、世界市場の70%を栽培していたほどのハッカ王国。ハッカもハーブの一種だし、栽培も上手く行くんじゃないか。最初はその程度の軽い考えでした」

こうして平成3年、工事関係者や技術者がそろった男の会社舟山組に、ピカピカの新社屋「ハーブ事業部」が誕生したのです。

無駄や苦勞の中で味わう

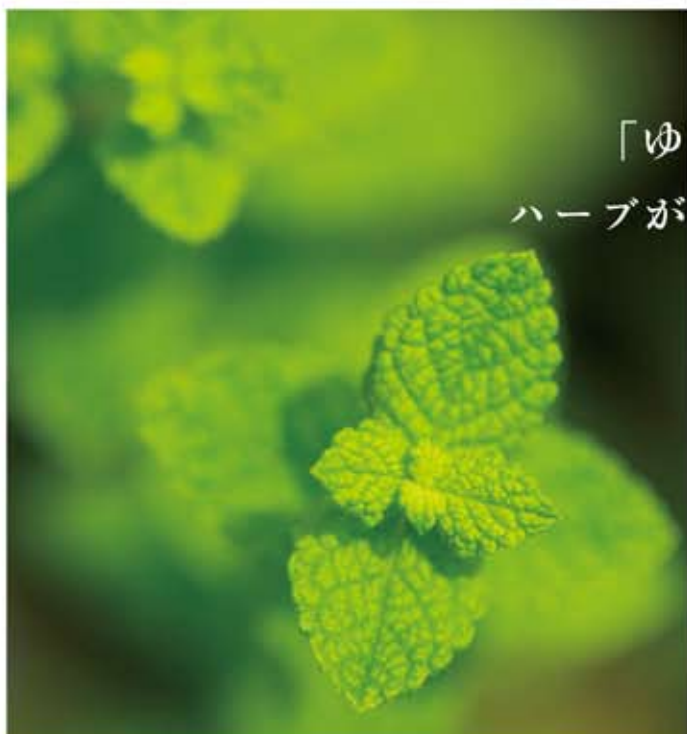
感動や生きてる実感

ハーブ栽培に挑戦する。言葉でいうのはカンタンですが、当時ハーブは百貨店の一角に輸入ティール

バッグが並ぶ程度のペールに包まれた存在。国内でハーブを育てている農家はごくごくわずか、それもレストランやコアな顧客からのオーダーに応じてというものの。当然ながら生産者向けの指南本やガイドブックなどは存在しませんでした。

「会社の資材置き場の一角でハーブ栽培を始めたのですが、わからないことだらけ。毎日が試行錯誤の連続でした」

さらに栽培方法が無農薬となれば、畑は雑草まみれ。化学肥料も与えていないため生育も悪く、収穫しても一般的とされていたサイズの半分から三分の一というもの



## 「ゆっくり生きていい」 ハーブが語りかけてくれるんです。

ばかりでした。加えて乾燥方法や製品化のノウハウもなかなか確立できないという、いわば八方ふさがりの状態。当初は応援してくれていた社員や周りの方々も徐々に「時間の無駄では」「儲かりそうにない」と口を揃えるようになったとか。中には「ハーブは舟山さんの道楽だよ」と皮肉る人も。

そんな声を耳にして、舟山さんはあることに気づきます。それは

経済活動の中に身を置き続けると、人は効率や成果だけに目を奪われてしまうということ。

「気にするのはプロセスではなく結果だけ。回り道をするのも、利益が生まれにくいのも悪いこと。いつの間にかそんな考えに支配されてしまふんですね。ま、以前の自分もそうだったのでしょうけれど」

確かにハーブの栽培は徒労の連続だったかもしれない。でもだからこそ、そこにはたくさんの発

見があり、ささやかな感動がある。今までと違う自分にも会えたんですと舟山さんは語気を強めます。

「経済活動の中で生き急ぐより、スローライフの中で生きてる実感味わう方が何倍もすばらしい。それを教えてくれたのが、ハーブの栽培です。だもの、止められるわけがないでしょう。結果的には周りの反対が、自分に勇気を与えてくれたんです」

### スローライフの考えを大切にしながら

オーガニックハーブの栽培加工販売という事業事例がない中、舟

山さんの大きな力になってくれたのは奥様のはるみさん。「東京や英国にまで足を運び専門知識や栽培ノウハウのほかハーブの資格を取得してくれました。当初よりうちのハーブティーのブレンド力が専門家を含めて高い評価を受けているのは彼女の技術力の賜物です」

そのほか研究者とのネットワークや新たなスタッフの加入も糧となり、当初は「猫の額ほど」だった畑も一気に拡大しました。

また製造品も当初はハーブティーだけでしたが、舟山さんの考え方に共鳴してくれる企業の協力、さらに専用の乾燥施設やハーブエキスの抽出設備などを備えることで、ソーブやスキんクリームさらにクッキーなど、コスメや食品の領域にまで広がりました。もちろん原料のハーブはすべて自社のオーガニック菜園から。どの商品も防腐剤や添加剤などの人工物は一切使用せず、手づくりを基本とするのがルールです。

「ハーブティーは微妙な乾燥の調整、花・葉・茎の混合バランスなどで味わいが大きく変わります。機械化すれば作業効率は上がるで

しょうけれど、それでは他の経済活動と変わらなくなってしまふ。ハーブの取り組みは、あくまでスローライフの一環なんです」

スタートから6年を経た平成9年には、舟山組ハーブ事業部から農業法人として独立、さらに同15年にはオーガニックの認定も取得します。練りに練った社名は「香遊生活」。押しつけでも驕りでもなく、楽しく遊ぶように日々の生活にハーブを取り込んでほしい、そんな舟山さんの思いを託したといえます。

### オーガニックハーブの力を もっとたくさんの人に

ゆっくり生きよう。回り道を楽しもう。栽培法だけではなく、ハーブを通じて伝わる舟山さんの思いに共感したからでしょう。香遊生活のハーブティや商品を求める人の輪は、年を追うことに広がっていききました。

「そしてありがたいことに、そのほとんどの方がリピーターになってくれたんです」

欧州においてハーブは薬局で扱

われるほど貴重なもの。日本では薬事法の関係で効能や効果を明言できませんが、ユーザーの中にはオーガニックハーブのある暮らしの良さを実感したという、感謝の思いを伝えるメールを送ってくれた人もいたとか。

「さらにハーブ畑を見たいと北見に足を運んでくれる人、自分の地元でも販売をしたいと申し出てくれる店。おかげさまでネットワークは数年で全国に広がりました」

現在では北見はもちろん、冒頭でふれた札幌マチナカのショッップ、さらに全国の百貨店やホテル、結婚式場、自然食品店などでの取り扱いも。アイテム数も100種を超えるほどになりました。

「自分たちの取り組みの評価だけではなく、オーガニックハーブの持つ力を全国の人が認めてくれていることの現れではないでしょうか。自分が信じてきたことが、ここに来てようやく実を結んだ気持ち。本当に嬉しい限りです」

インタビュ어의締めには舟山さんはカモミールティを一口。表情がいつそう穏やかになったのは、ハーブのおかげでしょうか。

### 最後に家族の話。



〈上〉「毎月東京に通い無井明子先生、桐原春子先生に師事しハーブの基礎を学びました」と奥様のはるみさん。〈下〉「親として一人の男としても父を尊敬しています」とご子息の亮真さん。

息子の亮真さんの案内で、ハーブ畑を歩いてみました。亮真さんは米国の大学で学んだ後、平成16年に一時帰国。就職のため再び渡

米する予定でしたが、父の先見性と生き様に深い感銘を受け入社を決意。現在はトップの聡明な右腕として畑や販売拠点を飛び回る毎日です。

歩みを止めた足先にはカモミールの群落。その向こうにはセージ、ミント、ラベンダーが。ミツバチが元気に飛び回っているのは自然栽培の証なのでしょう。

「ハーブは生活必需品ではありません。なくても暮らしていける。でも本当の豊かさや自分らしい生き方って、こういうプラスαの中

から生まれるもの。そんなことを、一つひとつ父の背中から学んでるんです」

その背中をいつ追いつ越せそう？ 投げた質問に笑顔で首を振る亮真さん。  
「うーん、まだまだ先は長そうです」  
すねえ(笑)

### 有限会社香遊生活

北見市柏木14-3  
TEL 0157-66-1201  
<http://www.koyu-seikatu.co.jp/>